

 書評

三村 將, 山鳥 重, 河村 満 著
 山鳥 重, 彦坂興秀, 河村 満, 田邊敬貴 シリーズ編集
 《神経心理学コレクション》

認知症の「みかた」

朝田 隆

神経心理学から認知症をみる

小泉首相以降の総理大臣の時代には難しいかもしれないが、旧版長谷川式テストには「今の総理大臣はどなたですか?」という問いがある。本書を読んでいて、かつて私が山梨にいたときに行った在宅認知症患者さん訪問調査の一角を思い出した。この問いに「それは知らないが、次は俺だ」と迷回答をした人がいたのである。

本書の三村先生のご発言によれば、空想作話をピックアップするのに定型的な質問があるらしい。「今年東大に一番で受かった人は誰ですか?」と尋ねればよい。空想作話の人は、それに得々と答えるらしい。「次は俺だ」はここからの連想である。

作話とか病識は、精神科医の中でも認知症を扱う医師なら必ず遭遇する問題・テーマであろう。しかし扱うには容易ならざるところがあって、正面から論じられることはまれである。ところが本書においては、3名のエキスパートがこの種のやっかいな課題を次々と俎上に載せてゆく。

読み進めるうちに、本書のテーマは認知症の症状を単症状(失語、失行、失認)の視点からみることなのだと気づいた。「神経心理学から認知症をみる」と副題をつけた新タイプの認知症本だなど一人合点した。

語り手の3名の先生は、精神科、神経内科、それに神経心理学のご出身である。三村先生のご発言はトップダウン的で視野が開ける思いがする。河村先生はボトムアップ型の理論展開を

される。これらを「ことば巧者」の山鳥先生が素人にも腑に落ちるように要約される。お三方のやりとりには、リズムがあってなんとも心地よい。

ところで筆者は最近、認知症介護の最大の問題は行動異常(BPSD)以上に、さまざまな生活行為の障害ではないかと思っている。食事をすればこぼしてしまう、トイレの使い方がわからず汚してしまう、ズボンを頭から被ろうとする。だから介護者のストレスはたまる一方。これらの症状に対して、従来は系統的な対応が試みられることはまれであった。経験と勘頼み、その場その場の対応が主であった。今やこうした症状への科学的対応方法の開発は喫緊の課題かと思う。対応を講じる上では障害の分析が発点だが、本書の姿勢「神経心理学から認知症をみる」はその基本となるだろう。

最後に、本コレクションの編集者である故・田邊敬貴先生の思い出を。先生の3年後に京都の同じ予備校と定食屋に通ったこと、先生の義弟とは10代からの付き合い、などなど不思議な因縁があった。高知のご生家ではワインを振舞われるままに泥酔したこともある。先生の好まれた言葉として印象に深いのは「邂逅」だ。先生のおかげでこの良書に「めぐり合わせて」いただいた気がする。学術性と臨床的含蓄に富む本書は、専門領域を越えて認知症医療と研究にかかわる人には必読の書であろう。

(筑波大学精神病態医学)

●A5 144 頁 2009 定価 3,150 円(本体 3,000 円+税) 医学書院